北海道海外技術研修員
平成15年度の研修を終えて

北方圏センターが北海道からの委託を受けて実施している海外からの研修員受入事業のひとつに「北海道海外技術研修員受入事業」というのがあります。これは、開発途上国の技術者などに北海道内の学校、研究所、企業などで技術を習得した上で将来自国の経済開発に役立ててもらおうと北海道が毎年受け入れをしているもので、平成11年度から15年度の累計で63名が各分野で充実した研修を行っています（内訳は次の頁の表を参照）。研修期間は6月上旬からその年度終了までの10カ月間にわたります。

まもなく研修を終える平成15年度研修員の中から2名の研修員の声、また受入先からの感想などを紹介します。

＜研修員の声＞

辻口春男アレシャンドレさん

（ブラジル出身、1977年生まれ。祖父が空知郡栗沢村＝当時、出身）

研修先：北海道東海大学工学部情報システム学科（札幌市南区南沢５条１丁目）
学長・光澤舜明

日本語の専門語を習得

「北海道に来る前、寒い気候と自分の日本語があまり上手ではないので嫌われたらどうしようという不安がありました」と謙遜するが漢字の読み書きを除いて全く支障なかったとは周囲の人たちの評である。

ブラジルで電気通信の会社に勤める技師で、今回の研修では北海道東海大学の上瀧實教授の研究室で携帯電話のシステムやネットワーク計画、最適化、1G、2G、3G間の違いなど新しい技術を学んだ。指導の上瀧教授は「とにかく、真面目で熱心です。日本語で技術分野の専門語の習得にも努めたので、帰国後は日本との技術交流にも大いに力を発揮するでしょう」と太鼓判を押している。インターネットを利用して２カ月毎に技術情報をまとめたレポートも提出してきた辻口さんは、「日本の進んだ技術を学べたことは素晴らしい経験でした。帰国後はブラジルで役立てたいです」。

「日本の伝統文化、習慣などを大事にする祖父母や両親に育てられたので先祖の国を見たいという気持ちがいつもありました」。研修の合間にはスノーボードを楽しみ、厳寒期の富良野市での交流事業に参加するなど心配していた寒さも克服した様子で、「また来たいです。今度来るとしたら、冬に来たいです」。が、札幌でも震度4の揺れを記録した昨年９月２６日早朝の十勝沖地震には、「ブラジルには地震はないので、とにかくびっくりしました」。まず部屋のドアを開け、備え付けのヘルメットをかぶり懐中電灯を手に階段で１階のロビーまで降りたそうだ。ところが降りてみると誰もいなくて、「ヘルメットに懐中電灯をもって避難したのは自分ひとりでした。今思い出してもおかしいです」。その後しばらく館内の話題の主だったようだ。

「北海道の人はオープンで本当に親切にしてもらいました。日本はどこでもきちんと組織だっていて安心して暮らせます」。６５年前に２０歳でブラジルに渡ったおじいさんの生まれ故郷の地も訪ね、雪を楽しみ、研修の成果をあげた。

＜研修先の先生から＞

北海道東海大学工学部情報教育センター
所長 上瀧　實 教授（工学部長）

ルーツに触れての感激も

「ブラジルからの研修生を引き受けてほしい」と言われた時、自己主張が強い異国人とコミュニケーションがうまく取れるだろうか、どの程度の日本語が使えるのか、など不安になりました。本学でも留学生と接する機会がありますが、この度のように９ヵ月間びっしりとお世話をすることはありませんでした。しかし、辻口さんにお会いして、これらが杞憂に過ぎないことだとすぐに分かりました。彼の話し言葉はほぼ完璧であり、他の日本人学生と区別することなく対処することができたのです。また、辻口さんはブラジルで日系の祖父母にかわいがられて育ったため、立ち居振る舞いや考え方も極めて日本的で大変誠実な若者でした。

研修中で思い出深い一コマをご紹介します。夏の大変暑い日、旭川での実地研修の帰り、辻口さんの大好きなおじいちゃんの故郷、栗沢町へ案内しました。大日本帝国が発行したおじいちゃんのパスポートを持ってきていたので、それを役場の職員に示し、おじいちゃんの本籍地の場所を特定できました。その場所は稲が青々と育っている只中にあり、一筋の人工水路が走っているところでした。辻口さんは流れる汗をぬぐおうともせず、四方を繰り返し眺め、写真を取っていました。またその足で、栗沢町の郷土資料館へ行きました。そこには、おじいちゃんの育ったころの生活用具、農耕・土木器具、教科書など当時の生活が想像されるものが陳列されていました。ここでもたくさんの写真をとり、丁度来ていた地元の子供たちとも話をしました。おじいちゃんから聞いていた、日本のお祭りや昔の苦しい仕事の様子などが、この景色の中に浮かび上がり、像が結ばれたようです。大好きな祖父の故郷にたいする真剣なまなざしに接し、私も熱い思いを共感しました。このような、自分のルーツにつながる大切なものに触れることも、研修の意義のひとつであることだと痛感しました。ブラジルに戻られて、大いに活躍されることを心より祈念いたます。